

# 「フレンドワークかざぐるま」の風になって

～さわやかな笑顔 みんなの力でまわる かざぐるま～

非特定営利活動法人かざぐるま

「フレンドワークかざぐるま」

施設長 松村百合子

毎朝9時を回った頃から弁当の入ったバッグを片手に元気な顔が集まってくる。出勤簿の押印から彼らの1日が始まるのだ。今日の当番はK君。言語は全く無いが、気にした様子も無くみんなに笑顔で挨拶をしている。それを当たり前のように受け入れ、挨拶を返す仲間がいる。「植木鉢を外に出すのを手伝ってください」M君が汗だくになりながら同僚のA君に声をかける。すると、近くにいた数人がキャスター付きの棚を一緒に運び出している。朝の会、ラジオ体操、清掃と一日の流れが定着してきた。開所してまだ5ヶ月だというのに、9時50分には作業を開始できるようになった。

4月9日の開所から5ヶ月あまり、通所生は16名。年齢は18歳から55歳までと幅広い。企業での仕事が続かず家庭に引きこもっていた者や福祉施設から家庭に戻ってきた者、養護学校高等部をこの春卒業した者など対象は様々である。「フレンドワークかざぐるま」は就労継続支援B型の授産所として、3月30日に県から認可されたばかりの施設である。



筆者 朝礼にて



出勤簿へ

## (1) はじめに

小中の養護学級担任を33年続けてきた私にとっていつも気になっていたことがある。障害者が働きたくても働く場所がない現状。せっかく就労しても、様々な事情で自宅に引きこもってしまうケース等。幸い伊豆市手をつなぐ育成会のメンバーとして活動していたことをきっかけに、共にNPOを立ち上げていくことができた。



作業所・店舗・事務所

昨年の4月、両親と死別し一人暮らしをしていたTさんの空き店舗を借り、Tさんを含めた5名の人たちと居場所作りを始めた。最初は店舗の飾り付けから、移動式の流し台を揃え紙漉きのような真似事を始めた。河原に行って数珠玉を集め、布を縫い合わせてお手玉を作った。思いつきのまま、手漉きの和紙でうちわやはがきが出来あがり、ついにランプシェードまで出来あがった。福祉祭りや青空市などに参加して、わずかながらも収入を得ることができた。

9月、10名の理事と共に非営利活動法人「かざぐるま」設立のための活動を開始した。伊豆市手をつなぐ育成会を中心に、主旨に賛同して下さる方への会員拡大運動が始まる。市の福祉課の助言も得ながら、事業所を「就労継続支援B型」にむけて、定款・申請書の作成とめぐるしい活動も展開された。

5名の通所者が7名、8名、9名と増えてきた。ボランティアさんも日増しに増えて、気がつくともTさんの店舗はお互いの肩がぶつかり合うほどの狭さになっていた。しかし、これが「フレンドワークかざぐるま」にとっては良い仲間作りとなった。紙をベースにした作業のために、材料作りもはじめた。三桎・楮の採



集は期日限定だ。2・3月の、木の芽が吹き出す寸前の樹皮が最良だという情報を元に、通所生と共に山に出かけた。栽培している三桮を提供して下さる協力者、材料作りのために工房を貸して下さる協力者等、気がついてみると多くの方の好意に囲まれていた。

2月23日、ついに「非特定営利活動法人かざぐるま」が認証された。

## (2)「フレンドワークかざぐるま」について

①事業の目的 私たちが暮らす地域には、様々な理由で働きたいと思っても社会への順応が難しく、企業での就労が困難な人や企業から離職された人々がいます。自分たちの力で何かできることをしたいと願っている人たちに、職業指導や生活指導を通して地域社会の一員として自立した生活ができるよう支援していくことを目標としています。

② 指導方針 ~ひとはみんなのために みんなはひとりのために~  
作業を通して働くことの喜びを仲間と共に分かち合う。  
気持ちよいあいさつや互いを思いやる心を培うことで集団生活の力を身につける。



### ③ 作業内容

- ア 和紙工芸 (はがき・しおり・かべかけ・名刺  
ランプシェード・うちわ・ポチ袋)
  - ・材料作り (コウゾ・三桮の採集と材料作り)
  - ・紙漉き           ・工芸
- イ 小物作り (・おてだま   ・アクセサリー  
                  ・らくらくいす   ・ミニぞうきん他)
- ウ 農耕 (・夏野菜   ・じゃがいも   ・さつま  
                  いも   ・さといも   ・ヤーコン他)
- エ アルミ缶リサイクル
- オ マッサージ (クイック (10分)  
                  マッサージ (30分)・(60分マッサージ))



### ④ 施設概要

設置・運営主体 特定非営利活動法人かざぐるま  
運営開始日 平成19年4月1日  
利用人員 20名 (就労継続支援B型)  
職員 5名



### ⑤ 日 課

9:30	朝の会・清掃・体操	13:00	作業開始
10:00	作業開始	14:30	作業終了・清掃
12:00	昼食・昼休み	15:00	反省会・帰宅

(休日 土・日・祭日・夏期冬期休業)

### ⑥ 通所について

対 象 心身に障害を有する16歳以上の者  
手 続 き 伊豆市健康福祉部 長寿介護課  
通 所 実習を経て決定します  
通所方法 自主通所

ここでは、「フレンドワークかざぐるま」広報パンフレットより、概要を記載した。16名の通所者の

うち、毎日の利用者は14名。伊豆の国市から通所している1名以外は伊豆市在住である。車椅子利用の身体障害者1名、全盲の視覚障害者1名、他は知的障害となる。車椅子の1名以外は、徒歩あるいは公共の交通機関を利用して自主通所をしている。

### (3) 街中に作業所を（機が熟するのを待つ）

成人障害者が働く施設のほとんどが、町並みから遠く離れた場所にある。共生社会と言われながら、障害を持つ人たちが自分の力で通うことも自立のために頑張っている姿を見てもらうことも叶わないのが現実であった。

「フレンドワークかざぐるま」は、伊豆箱根鉄道終着駅修善寺駅前にある。伊豆市全地域から交通の便がよく自主通所するには条件がよい。しかも、私が養護学級の担任をしていた20年間あまり子どもたちと行き来した場所でもある。つまり、行き交う人々は通所生の幼い頃からよく知っている人が多いのだ。顔見知りである好条件に加え、養護学級担任をしていた私の有り様を理解してくれる住人の多い地域であった。



成人した障害者の作業所という、どうしても暗いイメージを持たれがちであるが、それは大きな誤解である。彼らの明るさ素直さは格別だ。仕事をしたい、少しでも働いて自立した生活をしたい、と言う強い思いは学齢時の障害児には見られないことである。成人期を過ぎ加齢を重ねていく障害者であっても、認められる喜び褒められることの嬉しさは人一倍強いのだ。企業で働いた経験者は、判断する力や指示が理解できない等の理由でパニックを起こし解雇された。今ひとつ丁寧に説明していけば、作業の工程を整理していけば出来たはずの仕事であった。

### (4) 地域の文化を作業に取り入れる

修善寺には古くから伝わる「修善寺紙（しゅぜんじし）」という手漉き和紙がある。修善寺の小中学校の卒業証書はこの「修善寺紙」を自分で漉いている。この産業を是非とも作業種に組み込みたいと願って「修善寺紙再現の会」に籍を置いた。材料作りから工芸まで一貫した作業を組み立てていく和紙作りは行程が多く、しかもオリジナル製品を販売することで作業の達成感を実感できる作業種であった。しかし、これだけで運営していくには財政的に困難である。アルミ缶回収、自主製品の開発、農耕作業等、思いつくことは即取り入れている。

「あんまマッサージの治療院」は、「フレンドワークかざぐるま」のもう一つの顔である。視覚障害のKさんは修善寺中学の卒業生、4年前に国家試験で「あんま・マッサージ」の資格を取得している。昨年までは沼津の作業所で働いていたが、今年は念願の地元での開院となった。「フレンドワークかざぐるま」には、マッサージ室が設備しており一日に2名程度の来院者を迎えている。

企業からの委託作業を取り入れず、自主製品の制作にこだわっているのには理由がある。4月から開設し16名の通所者と家族との面談を重ね、サービス支援計画を作成している。本人や家族の願いを聞き取り、障害の実態を的確に捉え目標を掲げて行くには、企画にあった作業種では限界がある。手先の器用さを得意にしている者、体力に自信のある者、根気強く単純作業を持続することに自信のある者、パソコン操作に興味のある者等、得意な分野を見つけて行くにはじっくり時間をかけ様々な作業の工程を考えていかなければならない。納期に追われ、特質を見つけて行くことよりも生産量を優先していく



ことは危険である。

自主製品を主流に作業所を運営していくことは、実際はとても苦しい状況にある。通所者の工賃はこれらの製品の売上げを参加日数と人数で算出している。作業の能力ではなく、作業に参加する意欲を重視している。工賃を毎月決まった水準に保っていくためには、販売ルートを如何に広げていくかにある。これは、指導員と家族とNPO「かざぐるま」会員の仕事だと思っている。

今回「東養研」の冊子への原稿依頼を受けたとき、「フレンドワークかざぐるま」の宣伝をさせて頂くチャンスかと思い、お引き受けしてしまった。一人でも多くの方に「フレンドワークかざぐるま」に足を運んで頂きたい、みんなのがんばりにエールを送って欲しいと願っている。

## (5) 「フレンドワークかざぐるま」活動風景



## (6) まとめ

「東養研」の原稿を依頼されて、5年前の現役時代を思い出している。そして、今も尚東部地区の養護学級担当の先生方が頑張っているのだと嬉しくなった。「東特研」から「東養研」に名称が変わり、東部地区養護学級担当者の自主研修の場として各地区が交代で編集してきた研究誌である。一人担任のため、校内では研修する機会の少ない者が、自分たちの教育実践を伝え合う場面として活用してきた。「今、知りたいことは?」「困っていることは?」担当になったときは、魅力ある冊子にしていこうと語り合ったものだった。そんな懐かしさからつい軽はずみに原稿依頼をOKしてしまったことを後悔している。

障害者の自立を支援するための作業所設立は、私が養護学級担任（当時は特殊学級）になった頃から考えていたことだった。今、「フレンドワークかざぐるま」に通所してくるメンバーの半分は教え子たちである。それだけ就労し、自立していくことが難しい社会なのだ。企業の中には、以前は障害者の面倒を見てくれる力のある社員が居たが、今はそういう人も退職してしまい、とても面倒を見ながら雇用していくことはできないと言う話であった。でも、障害者は、障害があっても働きたいのだ。自分の力で試してみたいのだ。そして、一生懸命頑張っている姿をだれかに見て欲しい、知って欲しいのだ。みんなより、ちょっとだけ時間がかかる、みんなよりちょっとだけ話ができない、みんなよりちょっとだけ説明が欲しいだけなのだ。

終わりに、東部地区の養護学級担当の先生方に改めてお願いしたいことがあります。

- ・仕事ができる以前に、あいさつ返事がしっかりできる子に育てて欲しいこと。
- ・仕事の上手下手以前に、やる気（意欲）が欲しい。ほめられる習慣の付いている子は、喜びを素直に表現できる。

養護学級の先生の愛情あふれる指導こそ、障害児にとってあらゆる可能性を引き出す源となります。先生方のご健康を祈念して筆を置きます。